

# 中国人日本語学習者の助言行為に影響する要因について

## — 決定木分析を用いた検討 —

宋凌逸（名古屋大学大学院生）

### 要 旨

本稿では、中国人日本語学習者と日本語母語話者の助言行為に着目し、その助言行為が「親疎関係」と「事柄の深刻度」にどのように影響されているかを、決定木分析を用いて明らかにした。談話完成テストによってデータを収集し、意味公式の使用に焦点を当てて分析した。また、統計の結果をフォローアップインタビューで得られた質的データによって裏付けながら、対人配慮について考察を行った。その結果、中国人日本語学習者は重要な事柄に対して助言する際に、日本語母語話者より、「責任回避」の使用が少ないことがわかった。また、親しい友人に対しては行為を指示することや、助言の妥当性を示すように意見を多く述べるのが、中国人日本語学習者の特徴であった。中国人日本語学習者は日本語母語話者に助言する際には、上の立場から教えているように感じさせる可能性があるため、良好な人間関係の形成に支障をきたす恐れがあることが示唆された。

【キーワード】 助言 中国人日本語学習者 影響 要因 決定木分析

## 1. はじめに

他者とのコミュニケーションにおいて、人間関係を脅かしやすい言語行動として「助言」が挙げられる。Brown & Levinson (1987) によるポライトネス理論（以下、ポライトネス理論）では、助言行為は相手の「自律に対する欲求」を脅かし、相手のネガティブフェイスを侵害する行為であるため、不快感や摩擦を生じさせる恐れがあるとされる。また元 (2012) は、他人に助言する時、日本語母語話者は「情報を相手に提供する」という方法をよく使うのに対し、中国語母語話者は「先にやるべき行為を指示する」ことを明らかにした。このことから、中国人日本語学習者が日本語母語話者と異なる方法で助言すると、誤解を招く可能性が高いと考えられる。

このような問題意識から、本研究では、日本語母語話者と比べながら、決定木分析を用い、中国人日本語学習者の助言行為に影響を与える要因を明らかにする。

## 2. 先行研究と研究課題

デンスパー (2015) と高橋 (2017) における助言行為の定義を参考にした上で、本

研究における「助言行為」を以下のように定義する。

助言の送り手は、受け手の抱えている問題や悩みを解決するため、受け手にある行為を行うように伝える。助言される内容は受け手が知らないことであるはずなので、送り手と受け手に知識や経験の差があることが送り手と受け手により認識される。

## 2.1 日中接触場面で助言行為による摩擦の可能性

張・田崎（2014）は、日中母語話者に対し、談話完成テストを行い、量的に対照研究を行い、ポライトネス理論に基づいて考察した。その結果、相手と親しい場合、日本語母語話者はネガティブ、ポジティブ両方のポライトネスの観点から相手との関係を配慮しようとしていることがわかった。一方、中国語母語話者は、相談内容や相手との関係にかかわらず、ポジティブ・ポライトネスのストラテジーを積極的に使っていることがわかった。この結果から、中国語母語話者が親しくない日本語母語話者に対してポジティブ・ポライトネスのストラテジーを積極的に使用すると、過度の情報に受け取られ、相手の個人の領域を脅かす可能性があることが示唆された。

張・田崎（2014）は日中両言語の対照研究であるが、中国人日本語学習者の助言を対象とした研究として中崎（2011）が挙げられる。中崎（2011）は、中国人日本語学習者と日本語母語話者の助言行為の差異を研究するため、アンケート調査を実施し、ポライトネス理論に基づいて考察した。その結果、中国人日本語学習者にとって、助言行為は「親切行動」であり、人間関係を紡いでいく手段であることが観察された。これは、「ポジティブ・ポライトネスへの重視」という張・田崎（2014）の結果と一致しており、中国語からの語用論的転移が起こる可能性を示唆している。

これらの先行研究の知見から、中国語から語用論的転移があるか否かはさらに検証する余地があるが、助言行為の方法に関しては、日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に差があることがわかる。学習者が母語話者と異なる方法で助言すると、コミュニケーション上の問題を引き起こし、人間関係を壊すことにもなりかねない（デンスパー 2015）ため、日中接触場面における助言行為による摩擦が生じる可能性が示唆された。

## 2.2 助言行為に影響を与える要因

中国人日本語学習者の助言行為に影響する要因に関する管見の及ぶ限り唯一の研究として、黄・玉岡（2015）が挙げられる。黄・玉岡（2015）は、助言行為の有無に注目し、アンケート調査を行い、ポライトネス理論の枠組みで中国人日本語学習者の助言場面における意識と行動に影響する諸要因を検討した。その結果、相手を恥ずかしがらせる程度が、助言行為の有無に最も影響を与え、次に、親疎関係が影響を与えることがわかった。さらに、疎遠な相手に助言する際に、中国人日本語学習者は相手に

対する興味や関心を重視し、より頻繁に助言をする傾向がある。しかし、日本語母語話者の場合、親しくない相手は共感や仲間意識を育てる対象となり難しく、助言を諦めることが多いことが明らかになった。

このように、助言行為に影響を与える要因として、助言する際に感じる負担と関わる「事柄の深刻度(デンスパー 2015)」と「親疎関係」が挙げられる。黄・玉岡(2015)は、助言が出現可能な場面を設定し、「助言を行うかどうか」のみに注目しており、どのように助言するのかについては考察されていない。しかし、不適切な助言の方法や表現によって誤解や摩擦が生じる可能性もあるだろう。そのため、助言行為の有無だけでなく、その方法や表現も考察対象とする必要があるのではないだろうか。

以上のことから、中国人日本語学習者(以下、CJL)と日本語母語話者(以下、JN)がどのように助言するか、その助言がどの要因に影響されるかについてはまだ明らかにされていないと言える。そこで、本稿では、日本語の助言場面に着目し、JNとの比較を通して、「親疎関係」と「事柄の深刻度」がどのようにCJLの助言行為に影響を与えるかについて決定木分析によって明らかにすることを目指す。

### 3. 調査概要と分析方法

2022年1月から6月まで、アンケートサイト「Google form」を利用し、中国で日本語を学んでいる中国人大学生と、日本語を母語とする大学生にアンケートによる談話完成テストを実施した。CJLの有効データ数は50名、JNは32名であり、全て20代である。CJLは全てN1に合格しているが、学習歴は様々で(平均49.3月、標準偏差16.6月)、96%の対象者は日本で一年以上の長期滞在を経験したことがない。JNは全て日本の大学で勉強し、中国語の学習経験がない。次に、談話完成テストに協力してくれた対象者から無作為に抽出したCJL 10名とJN 6名にフォローアップインタビューを行った。インタビューの時間は、筆者の説明も含めて一人20～25分であり、CJLには中国語でインタビューを行った。

#### 3.1 データの収集

談話完成テストの場面は、以下の例のように、「授業/進学先の選択で悩んでいる友達に助言する」というものである。親疎関係・事柄の深刻度に基づく場面として、2×2の合計4場面を設定した。場面は日本語で提示し、協力者に日本語で回答してもらい、「日本人の友達」と想定してもらった。本研究において、談話完成テストという手法を採用したのは、この手法を用いて「状況的な要因をコントロールすることが容易である」(清水 2009 p.44)ためである。

また、本稿における「親疎関係」の判定基準について、Spencer-Oatey(1996)による「距離に影響する可能な要素」を参考にした上で、「社会的類似/相違、接触の頻

度、知り合ってから長さ」(Spencer-Oatey 1996、日本語訳はヘレン・スペンサー＝オーティ 2004 p.40を参考)という3つを採用した。そして「親しい友達」は「何年か前サークル活動で知り合い、週一回以上連絡し、親しい関係の同級生」とし、「面識がある友達」は、「先月、学生の交流会で知り合い、挨拶ぐらいしか交わさない同級生」とした。

「事柄の深刻度」について、Spencer-Oatey (2008) による「メッセージの内容に結びつくコストと利益」を参考にし、「事柄の深刻度」の高低は「コスト」と「利益」によって設定した。すなわち、相手が助言に従うことを想定し、一旦失敗したら時間、努力、金銭などの点でコストがかかるし、成功したら大きな利益が得られる。このように、コストがかかる程度、且つ利益の多寡を考慮しながら、事柄の軽重について事前に行った意識調査の結果を踏まえ、重い事柄は「大学の選択」にし、軽い事柄は「授業の選択」にした。

場面1 別の専攻の親しい友達は、〇〇専攻(あなたの専攻)に興味を持っているため、選択授業として〇〇専攻の授業を選びたいと言っています。友達は、その授業を選ぶかどうかについて、あなたに助言を求めます。あなたは何を言いますか。

友達： もうすぐ秋学期始まるね。

あなた： そうだね。早いねえ。

友達： そういえば、秋学期、〇〇専攻の授業を取ってみたいなあって思っているんだけど、どう思う？何かアドバイスとかあったら教えて欲しいんだけど...

あなた： \_\_\_\_\_

談話完成テストの終了後に、フォローアップインタビューを行った。当該場面においてこのように助言する理由、助言する際に考えたことなどを中心に協力者にインタビューを行った。

### 3.2 データの分類

高橋(2017)による助言の型、および張・田崎(2014)による意味公式を参考にし、収集したデータを表1の8つの意味公式に分類した。

その中で、「責任回避」と「人間関係強化」は張・田崎(2014)を参考に作成したものである。また、本稿における分類の枠組みと張・田崎(2014)との主な違いは、直接/間接のような分け方を使用しないこと、「情報要求」、「勧誘」、「助け」を加えたことである。さらに、日本語母語話者の会話において「行為指示型助言」「見解述べ型助言」「情報提供型助言」が最も多く出現していたと高橋(2017)において指摘されているため、それらの3つも本稿の枠組みとして加えた。

表 1 意味公式の分類

意味公式	意味機能	例（協力者・親疎関係・事柄の深刻度）
1 評価と情報提供	評価を述べ、客観的な情報を提供する。	授業は結構おもしろいよ。 (CJL02・親しい友達・軽い事柄)
2 行為指示	やるべき行為を提示する。	研究内容も調べた方がいいね。 (JN02・親しい友達・重い事柄)
3 勧誘	一緒にやろうと誘う。	〇〇授業を一緒に受けてみない？ (CJL07・親しい友達・軽い事柄)
4 意見陳述	論理性が強く、自分の意見を述べる。	一番大事なのは「あなたの目的は何ですか」 (CJL05・親しい友達・軽い事柄)
5 情報要求	相手のことについて情報を要求する。	その専攻で何を学びたいの？ (JN03・親しい友達・軽い事柄)
6 責任回避	決定権を相手に譲ったり、自分もわからないことを示したりする。	どこの大学院に進学するか決めるのはあなたの自由だよ。 (JN03・面識がある友達・重い事柄)
7 助け	助けを提供する意欲を表す。	いつでも聞いてね。 (CJL49・親しい友達・重い事柄)
8 人間関係強化	励まし、褒め、慰め、嬉しさの表明	大学院の試験頑張ってるね！ (CJL37・面識がある友達・重い事柄)

談話完成テストで得られた発話から意味公式分類（表1）に基づき、意味公式を抽出した。意味公式の分類は、筆者がデータを分析した後で、もう一人の日本語母語話者にセカンドコーダーチェックを依頼した。二人の判定結果が一致しなかった場合、相談したうえで決定した。その後、各意味公式の出現回数を計測し、ある意味公式を使用した場合は1、使用しない場合は0とカウントした。本稿ではその意味公式を使用したか否かにポイントをしぼり、発話内で繰り返し使用した場合でも、1とカウントした。CJLとJNのデータをそれぞれ処理し、当該意味公式を使用した人数が全ての人数に占める割合を出現率とした。

### 3.3 決定木分析

CJLとJNの母語による差異に注目し、「母語」、「親疎関係」、「事柄の深刻度」の3つの変量で分析を行った。これらの要因が意味公式の使用に影響するかを検討するために、SPSSによる決定木分析を行った。

決定木分析は、複数の独立変数のなかから従属変数を有意に予測した変数を選び、予想力の強い順に、交互作用を含み込み、階層的に分析する手法である（張ほか 2018）。カイ二乗検定の繰り返しを通し、独立変数が持つ条件の間で有意差がある場合のみ、子ノードが生まれ樹木が成長する（木山・玉岡 2011）。さらに、玉岡（2023）では、決定木分析を使う利点について、結果を樹形図で視覚的に分かりやすく描くことによって、統計の知識がなくても分析の結果が直感的に理解できる、と述べている。

「決定木分析は、説明したい事柄について、それを決める背景となる諸要因を解明することを目的としているため、言語研究でも大いに活用することができると考えられる」（玉岡 2023 p.2）。なお、これまでに、第二言語習得における背景諸要因の検討や語用論に関する研究に利用されてきた（張ほか 2018）。

本稿では、「母語」、「親疎関係」、「事柄の深刻度」が助言行為に与える影響を実証的に分析した後に、その結果を分かりやすく説明できるよう視覚的に図式化することを目指している。そのため、この研究手法が最も適当な方法であると考えた。

#### 4. 助言行為に影響を与える要因の分析

##### 4.1 諸要因の重みの順位

データを全体から捉え、決定木分析を行った結果として諸要因の重みの順位を表2にまとめる。「母語」、「親疎関係」、「事柄の深刻度」という名義尺度を独立変数とした。各意味公式の出現（「1」とカウントしたもの）と非出現（「0」とカウントしたもの）という2種類のデータからなる名義尺度を従属変数とした。8つの意味公式ごとに決定木分析を行い、その結果を示すのは以下の表2である。

表2 各意味公式の出現の有無に対する変数の影響

意味公式	影響が最も強い要因	次に影響が強い要因	影響が最も弱い要因
評価と情報提供	事柄の深刻度***	母語*	—
行為指示	母語**	親疎関係*	事柄の深刻度*
勧誘	親疎関係**	事柄の深刻度*	—
意見陳述	母語**	—	—
情報要求	事柄の深刻度**	母語*	—
責任回避	事柄の深刻度*	親疎関係* 母語**	—
助け	親疎関係*	事柄の深刻度*	—
人間関係強化	母語**	事柄の深刻度*	—

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

「評価と情報提供」の出現は「事柄の深刻度」に最も影響されており、CJLとJNの使用に有意差がみられた（ $\chi^2=6.172$ ,  $df=1$ ,  $p < .05$ ）。また、「情報要求」にも同様の重みの順位が見られ、「事柄の深刻度」の影響が最も強く、次に「母語」による違いが影響していた（ $\chi^2=5.923$ ,  $df=1$ ,  $p < .05$ ）。「責任回避」についても、「母語」は「事柄の深刻度」の次に影響していた（ $\chi^2=11.790$ ,  $df=1$ ,  $p < .01$ ）。「母語」と「事柄の深刻度」という2要因が影響する意味公式として、「人間関係強化」も挙げられる。しかし、重みの順位が反対になり、「母語」が最も強く影響しており（ $\chi^2=9.277$ ,  $df=1$ ,  $p < .01$ ）、「事柄の深刻度」は二番目の影響要因であった。

「行為指示」だけは3つの要因全てが影響を与えている。CJLとJNの間に有意な差があり ( $\chi^2=10.555$ ,  $df=1$ ,  $p < .01$ )、次に「親疎関係」が影響し、最後に「事柄の深刻度」にも関係していた。一方、「意見陳述」の出現に影響する要因は最も少なく、「母語」による差異 ( $\chi^2=7.091$ ,  $df=1$ ,  $p < .01$ ) しか見られなかった。

このように、「どのように助言するか」について各意味公式の出現はいずれかの要因に影響され、階層性も見られた。本稿では、CJLとJNを比較し、得られた知見を日本語教育へ応用するため、以下では「母語」を取り上げることにする。

4.2では、場面や相手に関わらず「母語」が最も影響を与えた意味公式を分析する。すなわち、表2において、「影響が最も強い要因」欄に示した通り、「行為指示」、「意見陳述」、「人間関係強化」が挙げられた。また、表2の「次に影響が強い要因」欄によって、「評価と情報提供」、「情報要求」、「責任回避」の出現に「事柄の深刻度」が最も影響し、次に「母語」が影響したことがわかった。この点について、4.3では、事柄の軽重の一方に限定し、「母語」が「事柄の深刻度」の次に影響を与えた場合について述べる。

## 4.2 「母語」が最も影響を与えた意味公式

「行為指示」、「意見陳述」、「人間関係強化」には「母語」が最も影響を与えることは既に述べた通りであるが、その3つの意味公式の出現に影響する要因についてより詳細な決定木分析を行った結果を図1に示す。

「行為指示」のノード0から「母語」という要因が伸びている ( $\chi^2=10.555$ ,  $df=1$ ,  $p < .01$ )。JNと比べ、CJLは「行為指示」をより多く使用すること (59.0%) がわかる。このように、やるべき行為を直接的に伝えるのがCJLの特徴といえる。

コミュニケーションの様式について、日本語母語話者は「迂回型・渦巻き型」であるが、中国語母語話者は「対決型・直線型」である (黄 2013)。本研究において「行為指示」が多いという結果からも「対決型・直線型」の特徴が窺える。さらに、CJLでは「親疎関係」の影響が見られ、親しい友達に対する場合ではより多く使用されていた (66.0%)。このことから、親しい友達に対する場合、CJLは助言を素直に言うことができると考えられる。その理由について、「親しい友達は家族のように扱い、直接的な言い方でもいい」というCJLの考えがインタビューから確認できた。しかし、CJLは親しい友達を身内として捉え、言葉遣いで配慮の必要がないと認識しているが、JNはインタビューで「親しくなければなるほど、友達が気にしているところがわかるため、そういう地雷を踏まないように注意すべきだ」と言っている。

以上のことから、親しい関係であればこそ、CJLは配慮を行わず助言することがわかった。しかし、「親しき仲にも礼儀あり」と認識するJNには、大事な仲間なのに気配りができないと誤解される恐れがある。そのため、CJLは親しい日本人の友達に対

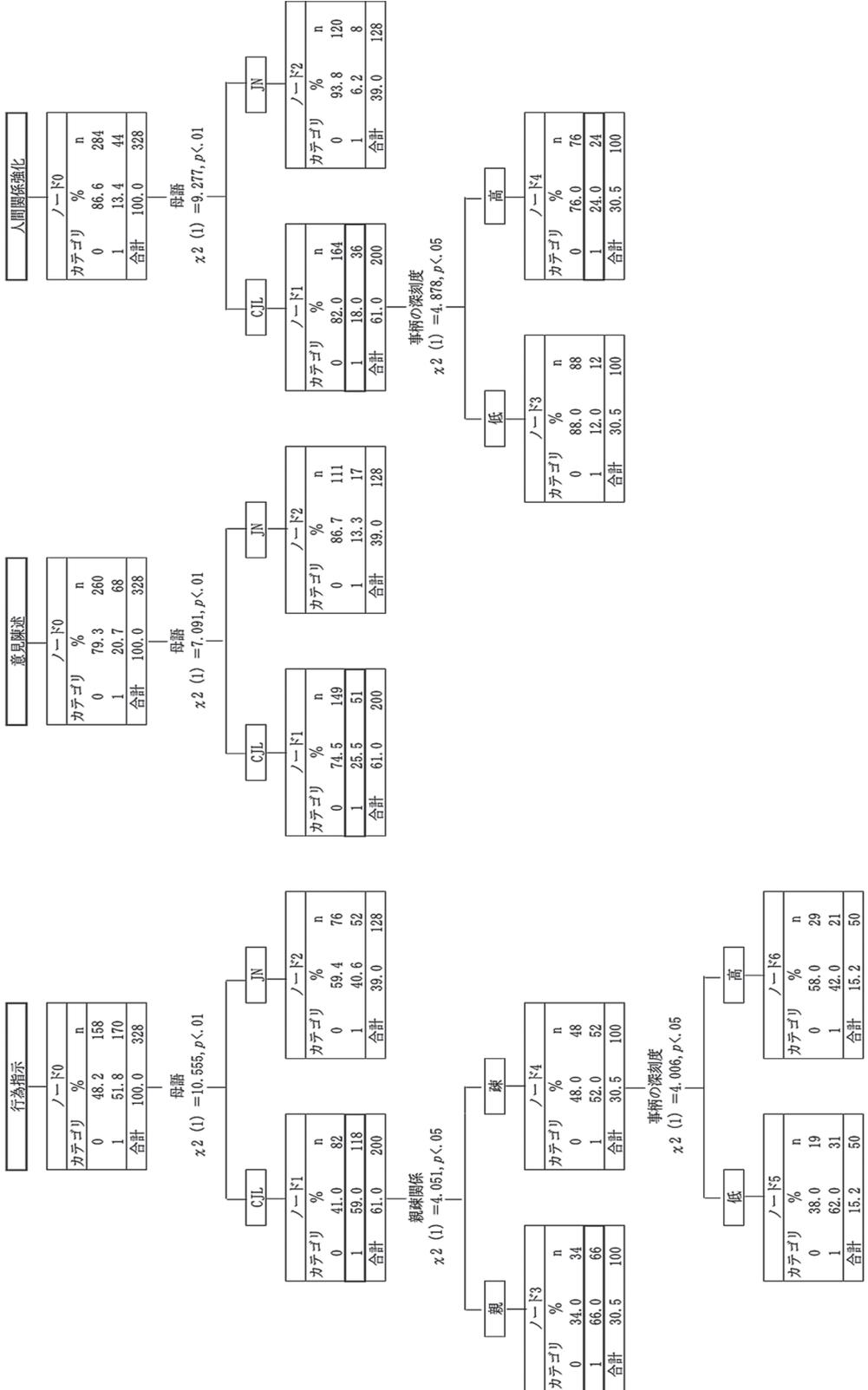


図1 「行為指示」、「意見陳述」、「人間関係強化」の出現に影響する要因についての決定木分析

する場合、相手が嫌なことやデリケートなことでも、直接に行為を指示したら、相手を傷つけてしまい、人間関係のトラブルを起こしてしまう可能性がある。

次に、「意見陳述」の出現について、図1から「母語」のみが影響しており ( $\chi^2=7.091$ ,  $df=1$ ,  $p < .01$ )、CJLによる使用はJNの2倍ほど多かったこと (25.5%) がわかった。つまり、CJLにおいて、他人に助言する際に、「自分の意見を述べる」ことが重視されているといえる。「意見陳述」を用いる理由について、インタビューの結果によって、CJLは「自分の意見を相手に認めてほしい」と考えていて、助言の妥当性を示すように意見を述べていることがわかった。

ところが、「言語の勉強はたくさんの単語や文法など覚えなくちゃね。頑張らなきゃ (CJL19)」、「一番大事なのは『あなたの目的は何ですか』 (CJL05)」といったように、誰でもわかるはずのことを助言している事例が観察された。このような内容の助言をすると、勉強を怠けることや、目的がないことを責めているような言い方になってしまい、相手は上の立場から教えられていると感じるだろう。その結果、「優越感に浸る」というネガティブなイメージが残ったり、「バカにされている」と反発されたりする恐れがある。

「人間関係強化」については、図1に示した通り、「母語」が最も強く影響する要因であり ( $\chi^2=9.277$ ,  $df=1$ ,  $p < .01$ )、CJLがより多く使用していた (18.0%)。さらに、CJLは重要な事柄に対して助言する際に、軽い事柄より2倍ほど多く用いていた (24.0%)。インタビューで、CJLは相手のことに関わりたくないと考えており、会話を早く終わらせるため、発話の最後に励ましや慰めの言葉を「建前」として用いたことがわかった。重要な事柄に対して助言をすることは、相手の人生を決めるようなストレスや負担が伴う行為であるため、たとえ自分の意見がはっきりしていても、建前を言って発話を控えるのだと思われる。建前を言うことは儀礼的であり、相手に干渉しないという点で、ネガティブ・ポライトネスのストラテジー (Brown & Levinson 1987) として捉えられる。

### 4.3 「母語」が次に影響を与えた意味公式

表2の「次に影響が強い要因」を見ると、「評価と情報提供」、「情報要求」、「責任回避」の使用にもCJLとJNの差が見られたが、これら全てに「事柄の深刻度」が最も影響していたことがわかった。深刻度が低いか高いかという一方に限定される場合に、CJLとJNはどのような違いがあるかについて分析する。

「評価と情報提供」と「情報要求」に関する結果は図2に示す通りである。「評価と情報提供」について、重要な事柄に対する場合、CJLとJNの差が見られ ( $\chi^2=6.172$ ,  $df=1$ ,  $p < .05$ )、CJLではより多く現れていた (62.0%)。これに関して10名のうち、3名のCJLに「本当に友達を助けたいから、自分が知っている情報をたくさん伝え

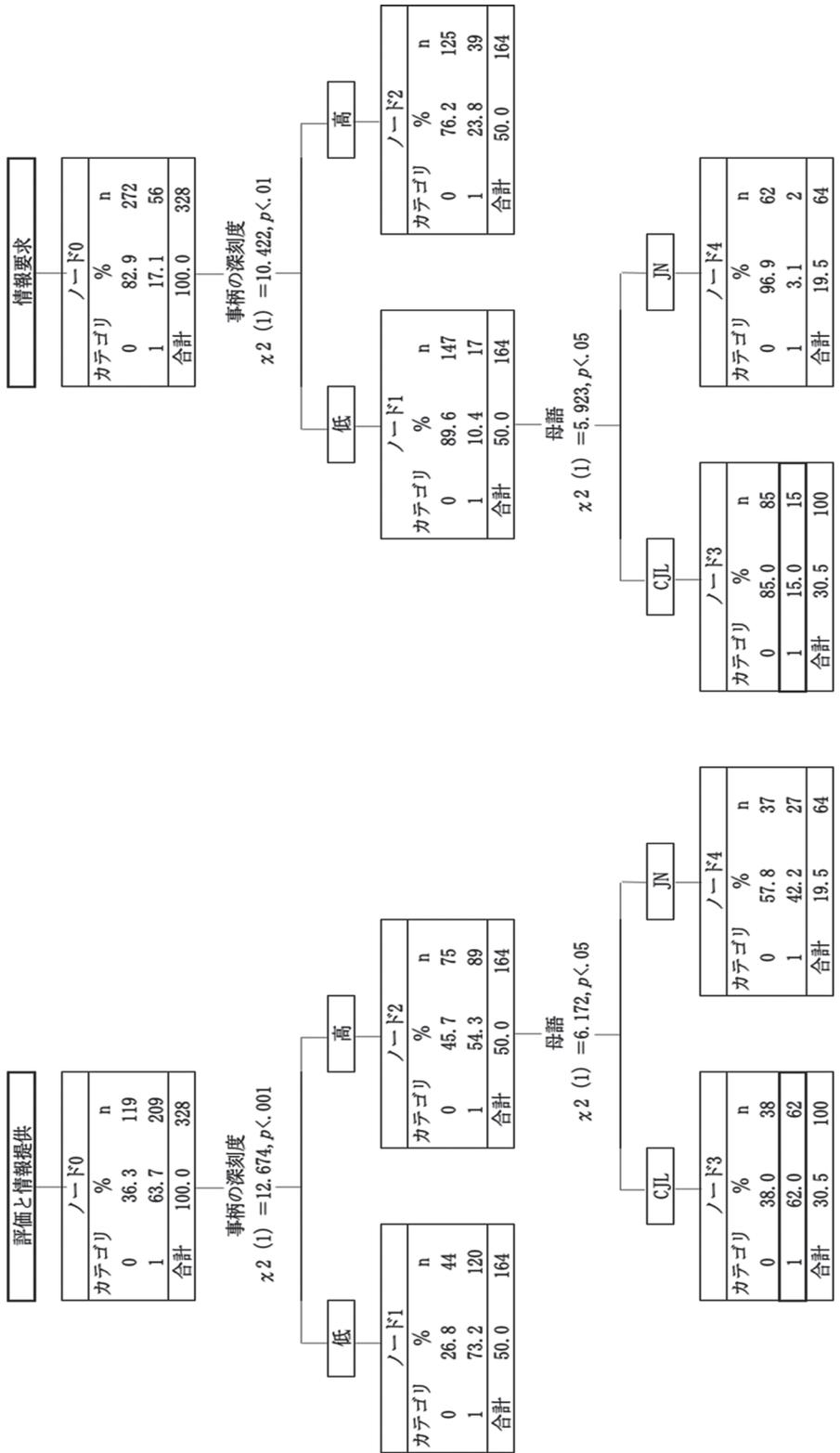


図2 「評価と情報提供」、「情報要求」の出現に影響する要因についての決定木分析

る」というコメントが得られた。つまり、重要な事柄に対して、CJLは相手を助けたいため、関連する情報を多く共有するのではないかと考えられる。

また、「情報要求」に関しては、事柄の深刻度が低い場合、CJLとJNの使用に有意差 ( $\chi^2=5.923$ ,  $df=1$ ,  $p < .05$ ) が見られ、CJLの使用はJNの5倍ほどであった(15.0%)。CJLでは、話が噛み合うように、「情報要求」で詳細を把握することが評価されると考えられる。さらに、関連する情報を出したり詳しく聞いたりすることによって、相手の立場に立って様々な角度から問題の解決を検討しようとする姿が見られた。これにより、「相手のことを思いやる気持ちの表れ」として、相手に「私のために色々考えてくれる」と思われ、心的距離が縮まるのだろう(季 2015 p.176)。

一方で、JNによる「情報要求」の使用は極めて少なく、場面1(親しい友達・授業選び)のデータにおいて「その専攻で何を学びたいの?(JN03)」と「どの授業を受けようと思っているの?(JN28)」しか観察されていない。友人の興味や授業選びの願望が既に明確に分かっていたため、JNはそれを前提にし、質問をしたと考えられる。それに対し、CJLの場合、場面3(面識がある友人・授業選び)では、「取りたい理由はなんだろう?(CJL25)」や「私の専攻のどこが好き?(CJL26)」のような例も散見された。その後、授業を勧めないという展開につながるかもしれないが、授業自体ではなく、相手の興味について掘り下げて聞いていた。

その結果、相手の興味に対する共感の欠如や不理解を表してしまい、相手に抵抗感を生じさせる恐れもある。相手の立場から考えることが必要であるが、季(2015)では、相手の本当の気持ちとずれていた場合には、期待した人間関係促進の効果が上がらないと指摘されている。

「責任回避」の出現に影響する要因には階層性も見られた。決定木分析の結果を以下の図3に示す。

図3に示した通り、「責任回避」の出現には「事柄の深刻度」が最も影響しており( $\chi^2=5.795$ ,  $df=1$ ,  $p < .05$ )、事柄の深刻度が高い場合に、CJLとJNの使用に有意差( $\chi^2=11.790$ ,  $df=1$ ,  $p < .01$ )が見られた。CJLによる使用はJNの3分の1程度であった(10.0%)。「責任回避」は、相手との距離を置くネガティブ・ポライトネスの戦略として捉えられ、日本語母語話者の使用は中国語母語話者より有意に高かった、という張・田崎(2014)で得られた結果と一致している。

インタビューでは、2名のJNが「私の意見で大学の進学先を決めると、悪い結果になってしまう可能性が高い」と懸念し、多大なる責任を回避し、前置きとして「私もよくわからないけど」と言ったほうが安全であると述べた。このことは、「もの言えは唇寒し」といった自己防衛の思想として捉えられ、「自己主張が弱く同調性が強い(許 2009 p.146)」というJNの特徴も窺える。しかし、誠実な物言いを強調するCJLにとって、保守的な助言は信頼性や誠実性を欠くものになってしまう恐れがある。

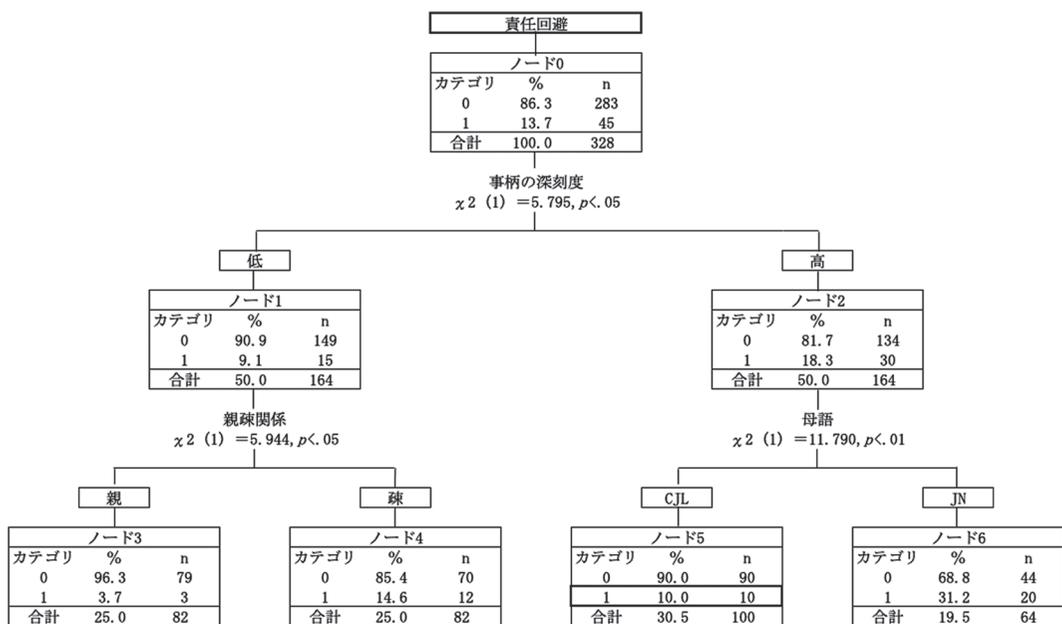


図3 「責任回避」の出現に影響する要因についての決定木分析

## 5. 考察

助言行為において多様な表現が使われているため、助言行為は人間関係の形成に関わる複雑な問題と言える。そこで、本研究では、談話完成テストを行い、高橋（2017）と張・田崎（2014）を参考にして8つの意味公式を作成し、それによってデータを分類した。そして、「どのように助言するか」に焦点を当てて、「母語」、「親疎関係」、「事柄の深刻度」が助言行為に与える影響を決定木分析によって明らかにした。

CJLがどのように助言するか、その助言がどのように「親疎関係」や「事柄の深刻度」に影響されるかについて、JNと比較した結果、以下の2つの知見を得た。

- (1) 「行為指示」、「意見陳述」、「人間関係強化」という3つの意味公式において、最も強く影響する要因は「母語」であった。場面の内容にかかわらず、CJLはJNより多く使用するということがわかった。その中でも、CJLは親しい友達に対して助言する際に、「行為指示」を有意に多く使っていた。また、重要な事柄の場合、CJLでは「人間関係強化」を「建前」として使うことが好まれる。

CJLは親しい友達を家族のように捉え、親身になって助けたいため、親しい友達に「行為指示」を多く使っていた。しかし、JNは、非常によく知った間柄であれば相手の嫌がることを既に知っているが、デリカシーにかけた言動をとってしまうと、相手を困らせると考えている。よって、CJLは日本人の親しい友達に助言する場合に、相

手が嫌なことでもストレートに行為を指示すると、助けの好意が伝わらず、人間関係に支障をきたす可能性があると考えられる。

続いて、CJLは「意見陳述」を多く使用し、助言の根拠を提示した上で誠意を持って相手を動かすことがわかった。この点について、助言の妥当性を示すことによって、相手が納得するようになり、信頼度も上がると思われる。確かに助言行為は「相手が知らない知識の教示（高橋 2017 p.123）」という性質を持っている。しかし、威張っている口調で意見を述べると、自己顕示欲が強い人になってしまい、上から目線で説教をしているかのように誤解される可能性がある。その上、日本人の場合、周囲との調和を求める志向性が強いほど自己主張の傾向が弱いことが指摘されている（三田村 2013）。CJLは日本人に助言する際に、このような日本特有の文化を尊重しながら、相手が受け入れやすい言葉を選び、柔軟性を持つことが大事であろう。

一方、CJLは重要な事柄に対する場合、「人間関係強化」を使い、建前を言うことで相手の選択の決定権を侵害せず、事柄に深く関わらないようにしたと思われる。

(2) 「評価と情報提供」、「情報要求」、「責任回避」という3つの意味公式には、いずれも「事柄の深刻度」が最も影響し、次に「母語」による有意差が見られた。軽い事柄の場合、CJLは「情報要求」を使用していたが、JNはほとんど使用していなかった。それに対し、重要な事柄に対する時、CJLは「評価と情報提供」をよく用いて助言していたが、JNより「責任回避」の使用が少なかった。

CJLは相手に情報を多く提供し、良好な人間関係を構築しようとしていると思われる。さらに、軽い事柄でも経緯を十分に把握しなければ助言できないと考える傾向がある。相手に情報を求めることによって真剣な態度を示し、一緒に困難を乗り越える仲間として付き合う姿勢を見せるのだと考えられる。しかし、「なぜ〇〇が好き？」と単刀直入に聞くと、相手の興味への不理解を表すと思われる可能性があるため、相手を不快にさせてしまいかねない。一方で、JNは重要な事柄に対して助言すると、「責任回避」を多く使用する傾向が見られる。CJLは、「責任回避」の使用に対して消極的に捉えずに、日本人の友達に断定的な助言をしないほうが良いことが示唆された。

## 6. おわりに

本研究は、助言行為に関する実証的研究であり、「母語」、「親疎関係」、「事柄の深刻度」が助言行為に与える影響について決定木分析によって検討を行った。特に、CJLがどのように助言するか注目し、JNと比較し、各要因の影響を明らかにした。その結果、CJLは①助言の妥当性を示すために根拠として自分の意見を述べること、②親しい友人は家族のような存在であるため、配慮せずに行為を指示すること、③軽い事柄に対して助言する際には、良い助言を与えられるように関連の情報を尋ねるこ

と、④重要な事柄に対する場合は、JNより控えめに言うことが少ないことがわかった。

CJLに対して指導を行う際には、親しい友達でも、相手の嫌なことなら直接に行動を指示しないように注意すべきである。特に、重要な事柄に対して助言する際に、譲歩や控えめな表現を用い、相手の領域に勝手に足を踏み入れないほうが良いと考えられる。さらに、相手に関連する情報を聞いたり自分の意見を述べたりすることが助言として有効であるが、上から説教していると思われぬように工夫する必要がある。

最後に、今後の課題について述べる。本研究では、CJLの助言行為に影響する要因に着目して分析を行ったが、人間関係の管理に関する示唆が多く得られた。そのため、今後は、助言を通してどのように人間関係を管理しているのかを明らかにしたい。なお、人間関係の管理を分析するには理論的枠組みが必要であると思われる。そこには、ポライトネス理論を発展させた理論として、Spencer-Oatey (2008) によるラポールマネジメント理論が挙げられる。ラポールマネジメント理論を用いることによって、人間関係の管理に重点を置いた分析が可能となる。今後は、ラポールマネジメント理論の枠組みによって要因を立て、助言行為に関する会話調査を行いたい。

## 参考文献

- 季珂南 (2015) 「日中大学生接触場面の初対面雑談会話におけるラポールマネジメントトピックの選択および話題部の導入と終了を中心に」 名古屋外国語大学大学院 国際コミュニケーション研究科博士学位論文 日本語学・日本語教育学専攻
- 木山幸子・玉岡賀津雄 (2011) 「自他両用の『-化する』における自動詞用法と他動詞用法の比較—新聞コーパスの用例に基づく多変量解析—」 『言語研究』 139、29-56
- 許恵玉 (2009) 「『日本文化』と『中国文化』のイメージ比較研究—日本人とのマインドマップ調査による検討—」 『山口国文』 32、136-150
- 元春英 (2012) 「『助言』の談話構造に関する日中対照研究—日本人大学(院)生と中国人留学生のデータをもとに—」 『日中言語対照研究論集』 14、93-104
- 黄郁蕾 (2013) 「テレビドラマにおける『助言』のストラテジーと選択頻度に関する日中対照研究」 『ことばの科学』 26、59-78
- 黄郁蕾・玉岡賀津雄 (2015) 「中国人日本語学習者の助言場面における意識と行動に影響する諸要因」 『言語文化と日本語教育』 48/49 合併号、11-20
- 清水崇文 (2009) 『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育—』 スリーエーネットワーク
- スペンサー＝オーティ、ヘレン (2004) 『異文化理解の語用論—理論と実践—』 田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・熊野真理 (訳) 研究社
- (Spencer-Oatey, H. (2000). *Culturally speaking: Managing rapport through talk across cultures*. Continuum Publishing Company.)

- 高橋千代枝 (2017) 「発話行為としての助言についての多角的研究—発話行為理論による特徴の記述と会話分析による日本語の助言相互行為の記述—」 京都外国語大学大学院 外国語学研究科博士学位論文 異言語・文化専攻言語教育領域
- 玉岡賀津雄 (2023) 『決定木分析による言語研究』 くろしお出版
- 張穎・田崎敦子 (2014) 「助言談話の中日比較—ストラテジーに着目して—」 『日本語教育と日本学研究論文集 (2014年度版)』 84-87
- 張婧禕・玉岡賀津雄・初相娟 (2018) 「中国人日本語学習者は日本語の漢字の書き取りが正しくできるのか？」 『中国語話者のための日本語教育研究』 9、52-68
- デンスパー, スワッターナー (2015) 「『助言』の会話の日・タイ対照研究—問題となる事柄の深刻度の高い場面に着目して—」 『日本語・日本文化研究』 25、22-33
- 中崎温子 (2011) 「第二言語環境下における留学生の『文化馴化』の一考察—L1とL2環境の中国人アドバイス発話比較を通して—」 『言語と文化：愛知大学語学教育研究室紀要』 24、139-155
- 三田村仰 (2013) 「アサーションと文化的自己観、対人恐怖の関連—会話完成テストと質問紙法による相関研究—」 『心理臨床科学』 3、3-11
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Spencer-Oatey, H. (1996). Reconsidering power and distance. *Journal of Pragmatics*, 26, 1-24.
- Spencer-Oatey, H. (2008). *Culturally speaking second edition: Culture, communication and politeness theory*. Continuum Publishing Company.